

龍華峠

しうや りふかふ

龍華越えの後、琵琶湖を涉った。

其処に至るまでの間、平家からの追討はもとより、僧兵とすらも言うに足りないならず者、狼僧ろうそうと言うべき欲得塗れの下衆どもの襲撃さえ受けるなど、様々な難儀を経ていた。

堅田かただの浦を出て、寒風に荒れる湖面を帆も張らず、ようやく野洲川尻やすかわじりに着くと、京とは異なり、雪深い。舟の上で身を隠すのに使っていた苫とまを焚いた。夜を待って、騎乗する。

伊吹、不破、靈仙などの山々であろうか、夜陰に普段よりも白い岳が天穹を凌駕せんばかりに聳え、こちらへその巨偉を張り出し、粉のような吹雪を透かしても迫るかのよう、恐ろしい威容であつた。

八騎の人馬はかすれた細筆の墨痕よりも侘びしい。雪にかき消されそうですらあつた。蕭々と逝く人々の、手綱にも鞍にも積もる。まつ毛は凍り、兜の眉廂には氷柱が垂れていた。

暗闇とは言え、眼の前の空間も、道も道祖神も木々も大石も、何もかもが茫と真白い。寒さで指や鼻先、頬の感覚は無きに等しい麻痺状態であつた。落人らの困憊したからだは鉛のように重くも、いつしかそれを覚えず。

源義朝、義平、朝長、頼朝と、鎌田兵衛政家他三名の武者であつた。平治の乱に敗れた源氏の頭領とその子息、郎党たちである。

守山の宿も越え、小篠原、大篠原を往き、日野川を涉って石寺の下に来たころ、三男、頼朝のいないことに気が附いた。

源頼朝は朦朧としていた。

吹雪にとざされ、無感覚状態に堕ちていた。寒さと疲労。未だ十四歳にもならない。無理もないことであつた。

篠原の堤辺りは記憶があつたように思う。日野川を渉るとき、隊列が乱れたが、そのときだろうか。

だが、今の朦朧たる意識には、そんな危機も遠いことのようにあつた。夢うつつのことであつた。

彼は幻視した。

蛭ヶ小島の流刑の地で、父、兄弟、源氏の一門の御魂を弔い、日々、読経する自らの姿を。肅々と唱える声が、空中に耀きとなって現象し、列をなしては帯のようによれながら、空中を廻り乱れ、二重露出のように舞う雪と重なり見える。

彼の眼には、白き雪が黄金の粉霧に見えていた。次第にそれは、いつか寺院で観た天蓋から垂らされた装飾、瓔珞や幢幡ようらく とうばんのようになっていく。

その燦々たるが一つ一つ経文の文字となり、彼の躰に螺鈿らでんのよう、又は金泥のように燦熙を内包する燦となり、泛ぶ。

臍下丹田に、見たこともないあざやかな唐紅、生々しい緋、濃い紅蓮あかのような深い丹い炎が滾るのを観じた。

蛇が皮を脱ぐように、すべてが脱落する。想いも、恨みも、名誉も、憤りも、意地も、自己保存も肯定も、執著も。さらりと脱げ落ちて、かろらかになり、さっぱりする。さらさるときよらなるかな。さやかなるかな。人為などなき天衣無縫の自由自在、天空に広がり、翻るかのごとく、天翔け躍り、身も裂き砕き、無際限に、自然法爾じねんぽうになるかな。

眉の間に白い光燦がまばゆく天地を蔽い、三千世界を炯らかにする。頭頂に輝く透明な純粹な、金剛の光が十一次元時空の無数宇宙とその森羅万象一切事象現象物象を、あまねくありありとさせる。

彼は一刹那、垣間見た。鎌倉の堂々たる屋敷で床几に坐し、参集した源氏恩顧の者どもを睥睨する自分の姿を。

だが、それは束の間のことだ。どうでもよいことだった。

雀が小枝に休みつ、藁屋根の人家を見下ろし、語り合っている。

「人間とは何という、愚かで、蒙昧な生き物だろう。」

ピーチク、パーチクと、何を言っているやら、さっぱりわからない。きっと、自然が与えた本能のままに生きているだけで、彼らには、知性も、物事の仕組みへ理解も、哲学も

ないのだろう」

だが、もう一人の思慮深げな雀は反駁した。

「果たしてそうだろうか。」

彼らの立場に立てば、まったく逆に、僕らが無意味な鳴き声を発する、思慮も言語もない、無知な者らに見えているのではないだろうか」

「あはは。」

くだらない空想を。生活のためには、何の意味もない」

思慮深げな雀は益々考え込んで、構わずに言葉を続ける。

「そう、僕らの言葉も彼らには通じていない。

僕らが真実だと思っている諸概念も、すべては幻影かもしれない。ただ、火や水のみが真実であるだけかもしれない。自知すべき冷暖のみが。

なぜなら、火や水を彼らも畏れ、又は楽しんでしているから。あれこそが現実で、それ以外は捏造なのではないか」

「そういうことは、俺も考えたことがある。だが、思料の結果、埒もないことと思った。考えても、どこにも着地できない、辿り着かないばかりか、進もうにも、竿すら差せない。余計なことを考えるな。何の幸福がある。

俺らは与えられた幸福を、与えられたままに生きることしかできない。凌駕することはできないんだ」

「そのとおりだと思う。

だから、僕は僕で、犀の角のように独り歩んで、自由に色々考えるんだ。犀が森を歩くようにね。

僕も亦た、誰とも異ならない」

平清盛の継母である池禪尼いけのせんには天くも凜たる頼朝に深く同情した。

仇や家の再興など心から捨て、深く仏教に帰依し、経を日々誦するならば、命助けて奉らんと想い、清盛に嘆願した。初め拒んだが、思い返し、赦す。

伊豆流罪とは言え、頼朝の身は比較的自由であった。箱根権現を参ったり、三浦半島へ馬を赴かせたり、又北条政子と縁を結ぶことなどもできた。

ある日の、深い、濃い黄昏のときである。

まだ二十歳にもならぬ頼朝は砂浜で、透明な浅瀬を、ゆらゆら像をゆがめながら逝く蟹を見つけ、何かが彼の感覚を合理的に解纜した。摩訶不思議の心機である。

脳髓の構成は解かれ、物象は一時解体し、かたちなさぬかたちすらもない、『恐るべき原野』となり、時の一次元性Ⅱ絶対的配列は崩れた。

夢が、そのときには理解されているのに、後で思い出しても、意味不明な具体世界を紡ぐように、世界が紡がれる。

気が附くと、既にその世界に擲たれているのであった。すべて存在というものは理不尽で、唐突である。

頼朝は見た。

夜の海峡だ。

島影や、真つ黒く屹^{そはだ}つ陸^{くが}があった。

何百艘もの船が海に浮かんでいる。唐船や戦船、大小様々であった。篝火が異様な緊張を湛えている。

一人の高貴な幼児が高貴な母とともに、公家武者たちにかしずかれて、船に乘せられようとしていた。

「いや、いや」

頑是なき子は突然、嫌がった。

それまで海も船も嫌いではなかったのに。きっと幼児独特の本能で、感じ取ったに違いない。この行く先が壇ノ浦であることを。幼児は安徳天皇であった。母は平徳子^{たいのとくし}、建礼門院^{けんれいもん}である。

頼朝は昏い黄金の波のうつきわに膝を突き、さめざめと泣いた。